

【秩父神社】

秩父神社は、日本最古の神社の1つであり、2014年に創建2100年を迎えた。この神社は、その美しい権現造りの建物や庇の印象的な木彫りが有名で、秩父夜祭におけるその中心的な役割でも知られ、学業成就、家内安全、子孫繁栄など、多くの御利益があるとされている。

秩父神社は、日本の伝説上の第十代天皇である崇神天皇の時代に創建された。当時、秩父は武蔵国（現在の埼玉と東京）の一部と見なされており、当時の国造が、自らの祖神であった八意思兼命を祀ったことに始まる。その後、この国造自身が知知夫彦命としてこの神社に祀られた。鎌倉時代（1185～1333年）、この地域は、日本史における偉大な武家の一つである平氏に支配されていた。平氏は、仏教の妙見菩薩（サンスクリット語：スダルシャナ）信仰を神社に取り入れ、「妙見を祀る神社」（妙見宮）と改名した。神道と仏教の両方の神を崇拝する神仏習合は、1868年に明治政府によって禁止され、妙見菩薩は神道の神である天之御中主神に置き換えられた。1984年、昭和天皇（1901～1989年）の弟宮の秩父宮雍仁親王（1902～1953年）が祀られた。これらの4体の神は、秩父神社の「御四柱」として知られている。

現在の神社の建物は、一つの幕府の下で日本を統一した強力な武将であった徳川家康（1543～1616年）の命令で建設された。神社からは武甲山が見えるが、この山には知知夫彦命の御霊が宿っていると信じられていた。三増峠の戦い（1569年）で神社が焼失した後、家康は、山と周辺の町を守るために神社を再建するよう命じた。1956年には、国家の有形文化財に指定された。

神社の建物の4つの側面のそれぞれの庇には、印象的な木彫りが施されている。これらは、東照宮の有名な彫刻である「眠り猫」（ねむりねこ）で名声を得た伝説の芸術家、左甚五郎（1624～1644年）により彫られたものと思われる。うわさによると、甚五郎の右腕は、甚五郎に嫉妬心を抱いていたライバルにたたき切られ、左手で彫ることを余儀なくされたという。その後、「左」を意味するヒダリという名前を付けたということである。

神社の正面（南）側には、無数の色彩豊かな彫刻で飾られている。特に注目すべきは、両側の切妻のすぐ下の虎である。「子育ての虎」と呼ばれるこれらの虎は、徳川家康による寄進を称えて装飾されたものである。家康は寅年、寅の日、寅の刻生まれとされている。不思議なことに、虎子の中に一匹のヒョウが描かれている。虎は日本原産の動物ではないため、17世紀初頭まで、雌の虎がどのようなものが正確に知られていなかった。当然、甚五郎はヒョウを見て、それが雌の虎であると想定し、それを参考に彼の彫刻が施されたのである。

神殿の西側には、庇の下でくつろぐ三匹の猿の彫刻が飾られている。日本の仏教美術で共通のモチーフである「悪を聞かざる」「悪を見ざる」「悪を話さざる」伝統的な賢い三猿とは異なり、甚五郎は「三匹の騒々しい猿」（お元気三猿）を彫った。「よく聞いて」、「よく見て」、「よく話す」三猿である。元気な猿も賢い猿も、猿は一般に悪や不運に対する魔除けと考えられている。

神殿の北側には、昼夜を問わず本殿を守っている「北極星のふくろう」（北辰の梟）が刻まれている。ふくろうは本殿の中に祀られている神に無作法に背中を向けているのではなく、自分の肩越

しに正面を見ながら、体は忠実に内に向いているのである。この神社で学業成就の御利益を「厳しい努力なしに」（不苦労）授かると言われているのは、北辰の梟に由来している。

神社の建物の東側には、もう一つの甚五郎の傑作である「鎖でつながれた龍」（つなぎの龍）が刻まれている。言い伝えによると、この彫刻はかつて少林寺（秩父礼所第十五番）近くの天ヶ池の底に住んでいた龍であった。龍が暴れると必ず彫刻の下に水溜りができていたことから、龍が動かないよう鎖を加えて繋ぎ止めたという。